

世界遺産を学んでいくと、概念です。

日常生活でなじみのある食文化や生産物が、世界遺産と深い関係があることが分かります。人類が自然と向き合いながら創り上げてきた文化の形成過程に着目し、そこに世界遺産としての価値を認めています。

世界遺産の背景を、今の私たちの生活に関連付けて知っていくことも、学びの楽しさのひとつです。

世界遺産の登録に値する価値観として、文化的景観という視点があります。

文化的景観とは、人間社会が自然環境の制約の下で、社会的、経済的、文化的影響を受け進化を遂げたことを示す

土地の地勢に合ったブドウ畑を構築し、気候に合ったブドウ品種を生産し、品質の高いワインを造り上げるための技術を磨くという、人類が時間をかけて築き上げた文化です。ワインに関連する世界遺産の代表的なものとして、高

文化が、自然環境や宗教文化と融合して築き上げられた価値として登録されています。ハンガリー北部のトカイ地方も同様です。

### 藤島 喜代仁 社会学部現代社会学科 教授

## 世界遺産を身近に感じよう

級ポルドーワインの産地であるサン・テミリオン地域が有名です。『サン・テミリオン地域』という登録名で世界遺産にリストアップされています。古代ローマ時代からのブドウ栽培の歴史とワイン生産の

実は世界遺産に関連して「業施設群」として登録されています。テキーラの原材料は現地生産されるリュウゼツランという植物です。古くから先住民文化を育んできたリュウゼツランの農園や蒸留施設が、文化的景観『リュウゼツランの景観とテキーラ村の古式産

世界遺産には、人類の営みの結果が原点になっているものが数多くあります。世界遺産を学ぶ学生たちには、個々の遺産の大切さとは別に、現代社会を見つめるきっかけとして、各地に目を向けることの意義を伝えていきます。

日常生活と結び付けながら、世界遺産の価値に思いを寄せ、世界で唯一無二のもの、課題に気づき、未来に向けて何をしたらいいのか、何ができるのかを考えていくことを願っています。



ふじしま・きよひと 1958年、山梨県韮崎市生まれ。中央大学法学部卒。高崎経済大学地域政策研究科修士(地域政策学)。日本航空株式会社勤務、育英短期大学教授を経て2021年より現職。観光実務、世界遺産、インターンシップ等の科目担当。